



Title	ハンガリー語のハンガリー人日本語学習者のアクセントに与える影響について
Author(s)	コズマ, カタリン
Citation	大阪外国語大学英米研究. 2006, 30, p. 107-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99305
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハンガリー語のハンガリー人日本語学習者の アクセントに与える影響について

Katalin KOZMA

1. はじめに

固定アクセントでストレス（強弱）アクセントのハンガリー語と自由アクセントでピッチ（高低）アクセントである日本語のアクセントが全く異なる。ハンガリー語ではアクセントが単語の最初の音節に来る。ハンガリー語の音の高さは日本語の高低アクセントと異なり、日本語のようにアクセントによって定まった高低の配置がないので、音が高くなるかどうかは文の意味とそれに基づくイントネーションによって決まる。そのためハンガリー語では、語における音の高さは文の意味によって変化するが、敢えて日本語のような高低アクセントという観点からハンガリー語の語アクセントを見れば、ストレスが語頭にある平板型であると思われる。

本論考では母語がハンガリー人日本語学習者の発音にどのような影響を与えるかを検討してみようと思う。¹⁾

2. 実験

実験の目的はハンガリー人学習者における日本語アクセントの誤りの傾向を明らかにすることと、その傾向に母語がどのような影響を与えているかを検討することである。先述のハンガリー語のアクセントのルール（アクセントは単語の最初の音節に来る、文の意味によって語にストレスが来ない場合もある）と実際の誤りの傾向に何らかの関係があるか以下実験によってこれを調査してみる。

2. 1. 調査方法

単語のリストは表1で見ることができる。選択した単語は全部4拍の語である。4拍語の場合、中高校に複数の可能性がある最少の拍数であり、誤りの傾向を知る上でより詳細に実態を捉えることができると考えたためである。

語を選択するとき語の音節構造も考慮した。それぞれのアクセントのグループの中では音節構造の種類は次のようになる:短+短+短+短、長+短+短、長+長、短+短+長、短+長+短。第1グループは平板型、第2グループは頭高型、第3グループは2拍で下がる中高校、第4グループは3拍で下がる中高校、第5グループは尾高型のアクセントの語である。実在の語で学習者にとって極端に難しくないと思われる語から選択したため、ある音節構造でそのアクセント型の語が少ないまたは存在しない場合もある。例えば頭高型の短+長+短の音節構造の語は非常に少ない、2型の長+短+短や3型の短+長+短の音節構造の語は体系的に存在しない。そのため調査語としては47語を用いて実験を行った。

2. 2. 読み上げ

単語は1つずつカードに書く。カードをシャッフルし、1回単語を読ませ、知らない単語の発音には母語の影響が現れる可能性があるので、知らない単語をマークする。それからカードをもう一回シャッフルし、二回読み上げさせ、発音を録音する。その後発音を分析する。

パイロットスタディーではキャリアセンテンスを用いなかったが、本実験では尾高型も検出するために「これは～です。」というセンテンスに入れて発音させた。

2. 3. 被験者

パイロットスタディーでは被験者は三人で、Aは女性、BとCは男性である。AとBは624時間、Cは390時間日本語の学習歴を持つ。日本語のアクセントについて体系的に勉強した人は、B、一人である。Cだけが日本に約1

年住んでいた（表2.1. パイロットスタディー）。

本実験は13人で行い、全員が300時間以上の日本語学習歴を持つ。4人以外日本に在住歴もあり、2人（A, H）は1年以下、他は1年以上在住した。M は8歳から12歳まで東京の高校に通学し、22歳時には1年間東京大学で学習した。そのため学習歴は明確にはできない。被験者はだれも日本語のアクセントについて体系的に学んだものはいなかった（表2.2. 実験）。

3. パイロットスタディーの結果と分析

表3で調査の結果を見ることができる。パイロットスタディーではキャリアセンテンスを用いなかったため尾高型のアクセントは検出できなかった。3拍で下がる中高型は非常に少ない。しかしアクセントを学習したBは2型の語を88.8%3型で発音した。この場合、Bは平板型と3型だけを発音し、中高型の場合は2型と3型の発音を区別できないが、頭高型の発音はないので、母語の影響はほとんど受けていないといえよう。

知らない単語の発音を比べると、Aは100%を頭高型で発音した。Bは50%を頭高型、50%を2型で発音した。Cは62%を平板型、28%を頭高型で発音した。母語の影響はアクセントを勉強せず、日本に住んでいることもなかったAの場合で一番大きいと思われる（表5.1.）。

全単語のアクセント型の表6.1.を見ると、アクセントを全然勉強しなかったAとCの被験者の発音は平板型と頭高型が一番多い。アクセントを学習したBの場合は、平板型と2型が一番多いが、他の型の発音もある。Aはアクセントを勉強せず、日本に住んだこともなかった。だから、母語の影響がもっともはっきり見られると考えられる。この被験者Aの場合は、標準アクセントの平板型の単語を主に平板型で、起伏式の単語を主に頭高型で発音した（表3）。標準アクセントの頭高型の語の75%を、2型の語の66.6%を、3型の語の81.2%を、尾高型の語の50%を頭高型で発音した。つまり、平板式と起伏式のアクセントをだいたい区別できるが、起伏式の中では、アクセントがどの音節に来るかはっきり感じるができない、ハンガリー語のアクセ

ントの影響を受け、言葉を頭高型で発音したと考えられる。B の場合はその影響がそのように顕著ではなく、平板型の発音になる傾向になる。

三人の発音で、平板型と頭高型のアクセントが一番多い。これがハンガリー人日本語学習者の特殊なパターンであるか否かを検討するために被験者の数を広げ実験を行った。

4. 本実験の結果と分析

全単語アクセント型の表6.2. を見ると、平板型で発音した語は68.4%、頭高型で発音した語は25.8%である。他の起伏式の発音はほとんど見られない。

個々の被験者の発音は、4つのグループに分けられる。ほぼ平板型、平板型が頭高型より多い、頭高型が平板型より多い、極端に頭高型に偏る、の4グループである。以下順に検討していく。

85%以上平板型で発音する被験者は D 85.1. %、E 95.7%、F 87.2、G 95.8 %、L 100%、M 100%である。これらの被験者の場合は起伏式の発音はほとんど現れないが、起伏式アクセントの表を見ると(表4.2. -4.5.)、これらの被験者の場合はハンガリー語のアクセントに似ている頭高型の発音も少ない。Fの場合だけ頭高型語の中で頭高型の発音は平板型の発音より多いが(表4.2)、他の起伏式語であれば、平板型の発音の方が現れる傾向があるようである。Dの場合は中高型語を平板型や他の起伏式の語と区別できている可能性が僅かながらあるかもしれないが、アクセントは2型か3型か区別できない。知らない単語アクセントの表(表5.2.)を見ると、同じ傾向を見ることができ。平板型の発音は他の起伏式の発音より多い、50%以上である(D 66.7%、E 100%、F 60%、G 80%、LとMは知らない単語がなかった)。

学習歴と日本在住経験を見れば、このグループの被験者は日本在住経験を持つか、または1000時間以上日本語を勉強している人である(表2.2.)。

全単語アクセントでは平板型語が頭高型語より多い場合はA、C、H、Jの場合である(表6.2.)。平板型語(表4.1.)の発音は、Aが100%平板型で発音した以外、100%ではないが、平板型の発音は頭高型の発音より多い傾向が見

える。起伏式語の発音にはそのような明瞭な傾向が現れない。起伏式語の中で、J の場合だけ頭高型の発音の優位性が見て取れる。他はほとんど平板型で発音する。しかし中高型語の場合は A、C、H の発音で違うパターンも現れるがアクセントはどの音節に来るか明瞭ではない。

このグループの学習歴と日本在住経験の間に大きい相違がある。H と J が日本語を学習した時間は500時間以下、J は日本にまだ行ったことがない。C は1000時間以上日本語を勉強し、日本に1年在住した。A は日本語学習歴は1000時間以下であり、3ヶ月の日本在住歴を持つ。

平板型より頭高型の発音が多いのは B と I の場合である。両者ともハンガリー語的な傾向と異なり、尾高型のアクセントもあらわれる。I の発音から、2型の発音に対するセンスが伺える。ハンガリー語母語話者としては中高型のアクセントで発音した単語の数が非常に多い。2型の語の100%を正しく2型で発音した。知らない単語の発音でも頭高型の影響はほとんど受けない。表4.3. を見るといろいろなパターンが現れる。B も起伏式語の発音に対して普通より大きいセンスがありそうだ。2型語の66.6%を2型で発音した。しかし3型の場合は(表4.4.) 頭高型の発音の率が多くなる(63.6%)。

知らない単語の発音でもこのパターンが現れ、85.7%を頭高型で発音した。

B と I も1000時間以上日本語を勉強し、B は日本にまだ在住せず、I は約1年間日本に住んでいた。

頭高型の発音が被験者の中で最も目立つ(74.5%) 被験者は K の一人である(表6.2.)。この被験者の場合はハンガリー語的な傾向がはっきり現れる。平板型語の発音では(表4.1.) 平板型がより多いが、起伏式語は(表4.2. -4.5.) アクセントがどこかにあると判断した場合も、アクセントは全ての場合に頭高型になる。知らない語(表5.2.) のアクセントの100%は頭高型で発音した。つまり、K の場合はハンガリー語の固定アクセントの影響が一番強いと思われる。

K の日本語学習歴は1000時間以下で、約1年間日本に住んでいた(表2.2.)。

次に、学習歴と日本在住歴がハンガリー人学習者の発音に影響を与えるか

を検討する（表2.2.）。

○85%以上平板型
 平板型>頭高型
 平板型<頭高型
 頭高型極端に多い

学習歴 \ 日本在住歴	在無 (短)	1 年	2 年 以上
1500時間	Ⓕ Ⓔ	Ⓒ Ⓘ	Ⓜ ⓔ
1000時間	Ⓓ Ⓐ	K	
500時間	J	H Ⓞ Ⓛ	

表に見られるのは、日本在住歴がない、または短い在住歴を持つ被験者の中では、以上のタイプの発音で3つのタイプが現れる。約1年在住歴を持つ被験者の中では、全ての4つのタイプが見られる。

同じ学習歴をもっている被験者の中では、さまざまな発音パターンが現れる。例えば1500時間学習した被験者には3つのパターンが現れる。

5. 結論

ハンガリー人日本語学習者の発音では平板型と頭高型のパターンが一番多い。平板型なら、ハンガリー語で日本語のような音の高さがないので、その上ハンガリー語でアクセントがない語も多いため、平板に発音する傾向が少なくないのであろう。さらに、ハンガリー語の最初の音節に来る固定アクセントのため、それを日本語に当てはめて頭高型の発音も多くなる。従って、このように平板型と頭高型のパターンが多いことはハンガリー人の発音では母語の影響がはっきり現れている結果であると思われる。

注

- 1) 『英米研究』という本ジャーナルの性格を考えた時、小論はいささかこの目的に適さないように思われるかもしれないが、筆者は最終的には、第2言語としての英語の習得に見られる諸相と、本研究の結果を比較・対照することを考えている。（なお、この点を明記するよう、2名の査読者からも助言を受けていることを記しておきたい。）

表1 発音実験の単語のリスト

グループ1	グループ2	グループ3
ともだち(友達) しあわせ(幸せ) くちびる(唇)	かまきり(螻蛄)	くだもの(果物) てつがく(哲学) しょくぶつ(植物)
いんさつ(印刷) けっせき(欠席) すうがく(数学)	おんがく(音楽) せいぶつ(生物) どうりょく(動力)	(0)
ぎゅうにゅう(牛乳) けんきゅう(研究) がっこう(学校)	げんだい(現代) せいよう(西洋) にっこう(日光)	がくもん(学問) しょくりょう(食料) しょくぎょう(職業)
がくせい(学生) しつもん(質問) しゅうくだい(宿題)	あかちゃん(赤ちゃん)	
スピード(スピード) にほんご(日本語) しゃしんか(写真家)	(0)	じてんしゃ(自転車) じどうしゃ(自動車) ひこうき(飛行機)
グループ4	グループ5	
かみそり(剃刀) かみなり(雷) のこぎり(鋸)		
しょうじき(正直) ぜいたく(贅沢)	しょうがつ(正月) ついたち(一日)	
けってん(欠点) あんない(案内) ちゅうおう(中央)		
おくびょう(臆病) せきたん(石炭) にちよう(日曜)		
(0)	いもうと(妹) おとうと(弟)	

表 2 被験者のデータ

表 2. 1.

パイロットスタディー	A	B	C
学習歴(時間)	624	624	390
アクセント体系	×	○	×
日本在住歴	×	×	1 年

表 2. 2.

実 験	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
学習歴	936	1456	1664	1092	1872	1664	312	416	1456	312	832	520	
アクセント体系	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
日本在住歴	3ヶ月	×	1年	×	2年	×	1年	10ヶ月	1年	×	1年	1年	18年

ハンガリー語のハンガリー人日本語学習者のアクセントに与える影響について

表3 パイロットスタディーの調査結果

標準 アクセント	被験者の アクセント	平板型	頭高型	中高型 (2)	中高型 (3)	尾高型
平板型	A	60%	40%			
	B	60%	20%	13%	6%	
	C	100%				
頭高型	A	25%	75%			
	B	62,5%	12,5%	25%		
	C	87,5%	12,5%			
中高型(2)	A	33,3%	66,6%			
	B	11,1%			88,8%	
	C	44,4%	33,3%	22,2%		
中高型(3)	A	18,2%	81,2%			
	B	9%	45,5%	27,3%	18,2%	
	C	45,5%	54,5%			
尾高型	A	50%	50%			
	B	75%		25%		
	C	50%		25%	25%	

表 4 実 験

表 4. 1. 被験者の平板型の語のアクセント

%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	100	66.6	80	100	100	100	100	80	33.3	66.6	53.3	100	100	83
頭高型		20	20					20	13.3	20	46.7			23.3
中高型(2)		6.6							40	6.6				17.7
中高型(3)		6.6							13.3	6.6				8.8
尾高型														

表 4. 2. 被験者の頭高型の語のアクセント

%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	37.5		25	87.5	87.5	37.5	87.5	62.5	12.5	37.5	12.5	100	100	57.3
頭高型	62.5	100	75	12.5	12.5	62.5	12.5	37.5	62.5	50	87.5			52.3
中高型(2)									12.5	12.5				12.5
中高型(3)									12.5					12.5
尾高型														

ハンガリー語のハンガリー人日本語学習者のアクセントに与える影響について

表 4. 3. 被験者の中高型(2)の語のアクセント

%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	77.7	22.3		77.8	100	100	100	66.7		44.4	22.2	100	100	73.7
頭高型		11.1	33.3							55.6	77.8			44.5
中高型(2)	22.3	66.6	66.7	11.1				33.3	100					50
中高型(3)				11.1										11.1
尾高型														

表 4. 4. 被験者の中高型(3)の語のアクセント

%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	72.7	9.1	54.5	63.6	91	91	90.9	72.7	9.1	45.5	9	100	100	62.2
頭高型	27.3	63.6	27.3		9			18.2	27.3	45.5	91			38.6
中高型(2)		18.2	18.2	9.1			9.1		36.4					18.2
中高型(3)		9.1		27.3		9		9.1	27.2	9				15.1
尾高型														

表 4. 5. 被験者の尾高型の語のアクセント

%	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	100	75	75	100	100	100	100	50		50		100	100	86.4
頭高型								50		50	100			66.6
中高型(2)			25											25
中高型(3)									25					25
尾高型		25							75					50

表 5 知らない単語の発音

表 5. 1.

パイロットスタディー	A	B	C
平板型	0%	50%	62%
頭高型	100%	0%	28%
中高型(2)	0%	50%	0%
中高型(3)	0%	0%	0%
尾高型	0%	0%	0%

ハンガリー語のハンガリー人日本語学習者のアクセントに与える影響について

表 5. 2.

実験	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	70.6%	14.3%	33.3%	66.7%	100%	60%	80%	66.6%	33.3%	33.3%				55.8
頭高型	29.4%	85.7%	66.7%	33.3%		20%		33.3%	16.6%		100%			48.1
中高型(2)						20%	20%		33.3%					24.4
中高型(3)									16.6%	66.6%				41.6
尾高型		25							75					50

表 6 全単語のアクセント型

表 6. 1.

パイロットスタディー	A	B	C
平板型	62,7%	42,5%	70,2%
頭高型	38,3%	19,1%	21,3%
中高型(2)	0%	34%	8,5%
中高型(3)	0%	6%	2%
尾高型	0%	0%	0%

表 6. 2.

実験 %	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	平均
平板型	78.7	34.1	48.9	85.1	95.7	87.2	95.8	70.2	14.9	53.2	25.5	100	100	68.4
頭高型	17.1	40.4	31.9		4.3	10.7	2.1	21.3	21.3	34.0	74.5			25.8
中高型(2)	4.2	19.2	19.1	6.4			2.1	6.4	42.6	6.4				13.3
中高型(3)		4.3		8.5		2.1		2.1	14.9	6.4				6.4
尾高型		2.1							6.4					4.25

参考文献

- [1] 秋永一枝 (1958/2001) 「東京アクセントの習得法則」 金田一春彦 (監修) 『新明解日本語アクセント辞典』 三省堂
- [2] 天沼寧、大坪一夫、水谷修 (1978) 『日本語音声学』 くろしお出版
- [3] 岩井康雄・窪蘭晴夫 (1993) 「東京方言複合語アクセント規則再考」 日本音声学会全国大会 (1993/09/03 於：群馬県立女子大学) 『研究発表論集』 pp. 73-78
- [4] 柴谷方良、景山太郎、田守育啓 (1981) 『言語の構造 音声・音韻編』 くろしお出版
- [5] 杉藤美代子 (1989) 「音節か拍か」 『日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻』 明治書院 pp. 154-177
- [6] 杉藤美代子 (1991) 「日本語音声の特質」 『日本語学 5月号』 明治書院 pp. 40-50
- [7] 杉山太郎 (1984) 「日本語の発音—中国語からの発音の学習から」 『日本語教育 55号』 日本語教育学会 pp. 97-110
- [8] 山田伸子 (1994) 「日本語アクセント習得の一段階 — 外国人学習者の場合—」 『日本語教育83号』 日本語教育学会 pp. 108-120
- [9] Fónagy Iván (1967) *A magyar beszéd dallama*, Akadémiai Kiadó, Budapest

- [10] Gósy Mária (1997) “A magyar beszéd tempója és a beszédmegértés” *Magyar Nyelvőr* 121/2, pp. 130-139
- [11] Iván Fónagy (1998) “Intonation in Hungarian” Daniel Hirst, Albert Di Cristo ed. *Intonation Systems - A Survey of Twenty Languages*, Cambridge University Press. pp. 328-344
- [12] Kiefer Ferenc (1994) *Strukturális magyar nyelvtan 2. — Fonológia*, Akadémiai Kiadó, Budapest
- [13] Mária Gósy (1994) “Question marking in Hungarian : timing and height of pitch peaks” *Journal of Phonetics* 22. pp. 269-281
- [14] Siptár-Törkenczy (2000) *The Phonology of Hungarian*, Oxford Univ. Press.
- [15] Varga László (1981) “A magyar intonáció — funkcionális szempontból” *Nyelvtudományi Közlemények* 83, pp. 313-339